

関東軍、情報収集急り補給軽視 ■歩兵、戦車相手に火炎瓶

日中戦争中の1939年5〜9月、旧満州（現中国東北）とモンゴルの国境を巡り、旧日本軍が旧ソ連・モンゴル軍と武力衝突して惨敗した「ノモンハン事件」から80年。計4万人以上が死傷した現地には今も爪痕が残り、不利な戦いを強いられた元日本兵や遺族は体や心に傷を抱える。日本が対ソ開戦を諦めて南進政策に転じ、太平洋戦争に向かうきっかけとなった事件を振り返る。

旧満州国境で日ソ衝突「ノモンハン事件」80年

死傷者4万人 惨敗の爪痕



旧満州とモンゴルの間で1930年代半ば以降、国境線を巡り小規模な衝突が繰り返されてきた。旧日本軍と旧ソ連・モンゴル軍は共に大規模衝突を避けていたが、日本陸軍の現地機関・関東軍の内務では、小康状態を打開するため打撃を加えるべきとの強硬論が唱えられ始める。戦後、旧防衛庁が編み出した戦史などによると、関東軍の参謀辻政信少佐は国境紛争が起きた際、越境もいとわないとする要綱を立

「参謀たちは責任も取らなかつた。無駄な戦争だった」

80年前の記憶は今なお鮮明だ。ノモンハン事件で日本兵として戦った島根県出雲市の柳楽林市さん(82)は、当時を思い出すたびにやるせない気持ちになる。圧倒的な戦力を誇るソ連軍を前に多くの仲間が犠牲になった。「無駄な戦争だった」との思いは消えない。

今も軍用機残骸、人骨

旧日本軍と旧ソ連・モンゴル軍が戦火を交えたノモンハン事件の現場には、大規模な武器弾薬の残骸や、戦車や装甲車の残骸が散らばっている。7月上旬、大分市のNPO法人「日本モンゴル文化経済交流協会」の関係者らと、主戦場となつたモンゴル東部のハルハ河周辺を訪れた。首都ウランバートルから東に約900キロ。航空機で東部の都市チョイバルサンに行き、そこから夜を徹し、悪路を車で計約10時間。緑が生い茂る小高い山が見え



野外博物館に展示されている軍用機の残骸。7月上旬、モンゴル・ハルハ河川沿い。 (共同)

を聞くだけで性能の良さが分かった。日本が国境としていたハルハ河を越え、徹夜で身を隠すための穴をつるはして掘った。夜が明け、寒暖の差が激しく、夏なのに外套を、ソ連軍の塹壕の向こう側に戦車がずらりと並んでいるのが見えた。歩兵中心の日本軍との装備の差は明らかだった。7月に入ると、点検するソ連軍の部隊も出動した。現場に向かう途中、日ソ両軍の戦闘機による空中戦を見た。「キーン」という連機のエンジン音

なく、多くの戦死者が出た。日本軍は十分な偵察や情報収集を怠り、ソ連軍がシベリア鉄道とトラックを使い補給を強化していることを察知できていなかった。突如的な見通しで戦況を継続し、精神論を強調して兵士を軽視。8月に始まったソ連・モンゴル軍の大攻勢を招き、最前線の部隊は次々に壊滅する。9月、停戦協定が成立。辻少佐ら参謀たちが甘い見通しを立てた作戦で日本兵の死傷者は約2万人に上った。責任を取らされたのは一線の連隊長らだった。ソ連側はその何倍もの砲撃を加えてくる(戦史叢書)ため、日本軍の歩兵が「砲兵はなるべく撃たないでくれ」という要求(同)をしたほどの苦戦の理由が一目瞭然だった。



ノモンハン事件への思いを語る柳楽林市さん=6月、島根県出雲市

同月下旬、百数十人いた柳楽さんの中隊は20人ほどに。中隊長も小隊長も戦死したが、生き残った戦友と共にソ連軍が守る高地に突撃した。たどり着いた時、至近距離で手りゅう弾が破裂。右鎖骨付近に大けがをして、近くの塹壕に飛び込んだ。その後、戦況確認に来た日本兵に救出された。隊はほぼ全滅した。戦功のためには1連隊3千人、消耗品にすぎなかったのだらう。参謀たちは作戦の失敗の責任も取らなかつた。ひどい話だ

てきた。日本軍が「コマツ台地」と呼んでいたソ連軍の陣地跡だ。コマツ台地からは、日本側が国境と位置付けていたハルハ河を含む一帯が見渡された。日本軍の陣地はいずれもここより低い。「わが砲兵が一たび射撃すると、ソ連側はその何倍もの砲撃を加えてくる(戦史叢書)ため、日本軍の歩兵が「砲兵はなるべく撃たないでくれ」という要求(同)をしたほどの苦戦の理由が一目瞭然だった。

モモンハンで事件は「ハルハ河戦争」と呼ばれており、コマツ台地から車で45分ほどの戦場跡は、モンゴル側の戦勝80年を記念して野外博物館として整備されていた。敷地には双方の陣地が含まれ、軍用機や装甲車の残骸を展示。さび付いてはいるものもあつた。日本陣地跡には日本語で「キリン」と書かれた瓶など、散らばつていた。周辺の土の中からは、いまだに当時のものでみられる人骨や歯が出てくるという。(ハルハ河共同)



ノモンハンでの戦闘で、ソ連軍が遺棄した戦車のそばをほふく前進する日本軍兵士=1939年7月

102歳元兵士、怒り
2019.9.8 神戸新聞分
戦争で領土を取り返すしかないと言う国会議員の方はやがて続く不幸をどう感じられるのでしょうか。